

授業を創る

持ち続けたいもの

「願いを形にしよう」と題した五年生全児童の作品が廊下に掲示されていた。担任に聞いたところ、粘土の作品は壊れやすく家に持ち帰っても保存しづらいことから、写真に撮り、作ったときの思いを添え、最後の感想も加えてA4サイズ一枚にまとめ掲示したということだった。

夏休み前の全校集会はこの話をしようと心に決めた。その晩遅く、天袋に仕舞っておいたダンボールの箱を取り出した。二十数年仕舞ったまま、いや、家の建替え時に移動した時にも中は開けていないので、正確には四十数年ぶりになる。ダンボールは劣化して引き出そうすると破れてしまったが、私の小・中学校時代の作品は無事保存されていた。プリントやテスト類、そしてノートは変色してセピア色になり、触れるとぼろぼろと崩れそうであったが、絵や習字の作品は当時とほとんど変わらない状態で出てきた。それらを見てみると、四十数年前にタイムスリップしたかのよう。不思議なもので、今まで忘れていたその時の思いや惑い・感動がよみがえり、私の心は小学生時代に戻っていた。深夜遅くまで自分の過去の作品一つ一つに見入っていた。

全校集会では、五年生の掲示物の話から、私の小学校時代の作品を紹介して、「自分の宝物を残して、世界にたつた一つしかない宝箱を作ろう。国語や算数でも、図工やその他の教科でも、簡単に捨ててしまえるものではなく、いつまでも残しておきたいものを、一つでも多く仕上げよう。」と呼びかけた。

「私の宝箱」を見直すと、子どもの気持ちがよく分かる。小中学校時代の膨大な作品から今ある物を選んで残したのは当時の私自身である。誤字脱字があったり拙い物であったりで、決

して優秀な誇れる物ではない。苦勞して取り組み悩みながらも自分で決めたことや、こつこつ努力したことが分かる物ばかりである。ある書道展に出品するために何十枚も練習したが、字配りがうまくいかず、不本意ながら指導者のお手本を写した作品が出品されたことがあった。賞に入った唯一の条幅である。しばらく家に飾ったが、私の宝箱には残らなかった。

私には苦い経験がある。教職に就いてまだ十年は経っていない頃、展覧会に出す版画の指導に夢中になったことがある。図工の指導は苦手だったが、先輩のように入選作品をたくさん出したいと思ったのである。題材を吟味し彫り方も研究して、事細かな指示をして制作の指導にあたった。その結果多数入選し、上位の賞に入った作品もあり、私自身は大いに満足だった。記念に手元に残したいと思い、拒否されると予想しながら「版木を学校に置いておけないか。」と頼んだところ、いとも簡単に「いらないからあげる。作品もいいよ。」と言われた。そう答えた児童が複数いたことに愕然とした。あれだけ時間をかけて制作したのに児童には作品に対する愛着はなかった。言われるとおりに彫っただけの作品でしかなかったのである。以後、図工に限らずどの教科でも児童の思いや興味関心を大切にし、授業のねらい達成を目指しながら、一人一人の自己実現に繋がるような指導を心がけ努力してきたつもりであるが、今振り返るとどれも未熟で、児童が持ち続けたいものを残せたのか、恥ずかしい限りである。

教師の都合や思い込みでなく、児童にとつて今何が大切で、必要なことは何かを見極めて授業に取り組むことが、児童の宝物を増やすことになるだろう。

全校集会の最後に、「五年生は作品を返してもらったら、捨ててしまふかな。」と聞いたら、首を大きく横に振っていた。持ち続けてくれると信じた。

教師の姿が見える教育を

私が教職に就いた昭和四十年代半ば、多くの先生は授業が終わると、教科書とたくさんのチョークが入った大きな木の箱を抱え、チョークの粉を掃いながら職員室に戻ってきた。そういった先生の教室を覗くと、白・黄・赤など巧みにチョークを使い分け、実にしっかりと丁寧な字で板書がなされ、何を勉強し、何が大切な事項なのかが一目瞭然であった。私にとつては、先生の仕事を象徴するかのような懐かしい光景である。今では、この光景から想像できる授業の全てを肯定することはできないが、私たちが忘れてきた、教師のあるべき姿が描かれてはいないだろうか。

一 見えなくなった教師の姿

子ども主体の学習が提唱されて二十数年になるが、それが正しく理解されることなく、教師が「教えるべきことはしっかり教え」「伝えるべきことはしっかり伝える」という、教師が前面に出て指導するという姿勢が誤りであるかのような「教師の姿が見えない教育」が続いている。教師が目標達成のための、明確な指導方針や具体的な手立てを持たないまま、子ども主体と称して、ただ単に子どもの意思に任せた活動が多く見られ、教育活動の設計者・実践者としての教師の姿が見えないのである。

二 教師の姿が見える教育を

学習の主体は子どもであっても、授業の主体は教師であることを忘れてはならない。子ども主体の学習といっても、本当はそこには、教科の哲学や教材観に裏打ちされた目には見えない、耳には聞こえない教師の巧妙な手綱捌きがなくてはならない。例えば、課題解決学習といって

も、あたかも子どもが課題を見つけたかのような、あたかも子どもが課題を解決したかのような、綿密な授業設計のもとでの授業、つまり、あたかも子どもが自ら活動しているかのように仕組まれた授業を子ども主体の学習というのではないだろうか。

そのために教師は、明確な指示・発問、明瞭な発音・発声、明解な板書・チョークの使い方などの指導技術や、目標の明確化、目標を達成するための展開の工夫などの指導方法を身に付けなければならない。今、基礎・基本の大切さが叫ばれているが、こういった教師の基礎・基本をしつかり身に付けなければならない。明確な目標とその達成のための具体的な手立てを持った、授業設計者・授業の主体者としての教師。意図的・計画的な発問や構造的な板書ができる教師。教えるべきことはしっかり教えることができる教師。そういった教師の姿が見えるところに教育が成り立つ。

このことは、児童・生徒指導にあっても同じである。子どもの視点に立った児童・生徒指導と言っても、ただ子どもの言い分に耳を傾けるだけではなく、是々非々を明確に伝え、大人の視点にまで子どもを引き上げる児童・生徒指導でなくてはならない。譲るに譲れない線は何か、引くに引けない線は何か、一線を画する態度の表明ができる教師。禁止、命令などをためらわない教師。時には、価値観や規則を押し付け納得させることができる教師。そういった人生の先輩としての教師の姿が見えてこそその児童・生徒指導である。

「教え指導する」という、教師の明確な姿勢が見えないところに教育は成り立たない。「教師とは一体何をする人なのか」をもう一度問いただし、子ども、保護者や地域の方々に「さすが先生」と言わしめ、教師の信頼と権威を回復しようではありませんか。

「確かな学力」の向上のために

よく「教師は授業で勝負する」と言われる。言い尽くされた言葉であるが故に重みがある。今、教師の資質や能力が問われている。教科指導はもちろん児童指導、情報化社会、特別支援教育等、多種多様な資質や能力が求められている。しかし、第一は授業であり、子ども一人一人にわかる授業を行うことが大切である。そして、それが子どもとの信頼関係を構築し、ひいては保護者や地域との信頼関係にもつながる。

変化の激しいこれからの社会を生き抜くためには、単に多量の知識を記憶しているということではなく、社会に出てからも、学習によって習得した諸能力を、初めて遭遇する問題や場面において活用し、自ら学び、自ら考え判断し、問題をよりよく解決していく力をはぐくむことが大切である。

平成十四年一月に文部科学省が出した「確かな学力の向上のための二〇〇二アピール」「学びのすすめ」においても同様に捉えており、基礎・基本の確実な定着、課題を解決していく能力の育成、学ぶ意欲や学ぶ習慣化の形成、一人一人の個性や能力を伸ばす指導の工夫・改善に取り組むことを促している。

こうした社会の要請を受け止め、前任校において全校体制で取り組む学校課題を『「確かな学力」をつけるための指導法の工夫」とし、副主題を「基礎・基本の定着を目指して」と設定した。「確かな学力」とは、基礎・基本、つまり学習指導要領に基づく学習を行うことで身に付く様々な力を中核とし、課題発見能力、思考力、判断力、表現力、問題解決能力、学ぶ意欲、知識・技能、学び方などの資質・能力を備えた主体的な学びと捉えた。

基礎・基本の定着については、特に小学校での教育が以後の学習の基礎となることから、基礎的・基本的な知識と技能については、繰り返し確実に身に付けられるようにする。そこで、一人一人の子どもが基礎・基本を確実に身に付けるために、個に応じた手厚い指導が欠かせないことを教職員で共通理解して指導に取り組むようにした。そのための指導体制を担任の教員も含めて、T1・T2の授業をどの学年にも対応するように整えた。指導方法では、一斉指導のほか小集団や個別指導、繰り返し指導、また子どもたちが自力解決できるように、教師の助言だけでなく、ヒントカード、練習問題、まとめとしてコンピュータなどを取り入れて基礎・基本の定着を図ってきた。指導案作成では、低・中・高別ブロックごとに原案を検討し、その中に本単元で定着したい観点ごとの基礎・基本と単元のプレテストによる実態把握、課題解明のためのブロック研究項目に対する手立て（場面・方法）を位置づけ、本時では、T1・T2の役割を明確にし、研究授業を通して検証することにした。

全体会では、一人一人の子どもたちが基礎・基本を確実に習得しているかなど、学習状況を把握し、常に「確かな学力」の向上を目指しながら、学習指導法の工夫・改善に取り組んだ。評価として、三学期に全学年のテストを実施し、昨年度と比較して学力が徐々に向上してきていることを確認することができた。

「確かな学力」の向上には、全校体制で授業の質を高める必要があると思う。教育改革真っ只中だからこそ、「教師は授業で勝負する」という言葉の重みを改めて感じとり、初任のときの気持ちを忘れることなく、信念と「情熱」「熱意」「熱心」等をもって指導に当たることが大切ではないだろうか。

子どもたちから学んだこと

黒板に「宿題  」と描いた最初の日、子どもたちは「？」と言って、そのうち「梨だ。」「宿題なしだ！」と大騒ぎをしていたのも、つい昨日のことのようです。

いくつかの学校を経験し、ある町の小学校に赴任したときのこと。私の担任は四年生。一年生から三年生まで編制替えのないクラスでした。私は、やんちゃなこのクラスの担任として、すんなり受け入れられるか不安でした。考えてみれば、保護者にとっては、まったく見ず知らずの他人である私に、感性豊かな子どもたちを全面的に託すことがとても不安であることには違いないのです。そんな不安をお互いに抱えた最初の家庭訪問の時には、地理の不安な私を、車で先導してくださった保護者の方もいて、感謝の気持ちでいっぱいになりました。のどかな田園地帯を見ると、今でもその時の親切な保護者の様子が目に浮かびます。子どもたちを「少しでも良くしていきたい。」という気持ちは、日々膨らんでいきました。

私は、まず、子どもたちに十分身に付いていることは何か、欠けていることは何かと思い悩みました。さて、どこから手をつけようかと迷った挙句、手始めに、国語の教材「ガオーツ」の学習計画作りをしました。グループに分かれ、各段落の区切りを見つけ、時間をかけた話し合いを多く取りいれました。また、作成している様子を写真に撮り、教室内に掲示しました。出来上がった学習計画を発表し合い、各グループの相違に気づかせる活動もしました。

担任して一ヵ月が経ったところから、「興味のあることはやめない」という姿で学習をし続ける子どもたちのよさに気づきました。私は「授業の手抜きはしない」、「授業中の子どもたちに手を抜かせない」ことを心に誓いました。

しかし、あるとき「リレーをしましょう。」と言うと、全員一斉に裸足になって、走る順番を口々に主張し始めました。その様子は、教室で授業に熱中し始めた子どもたちとは思えませんでした。また、教室内を歩く人に、横から突然足を出し転ばせることを繰り返してしまう光景にも唖然としました。道徳で「粘り強く学習することや「思いやり」について指導しても、建前であって本音ではないことを見事に私につきつけたのです。そうしたことも、日々の学習の中で身に付けさせなければ定着していかないことに、いやというほど気づかされました。

卒業までの三年間で、特に印象に残るのは、理科「水の中の小さな生きものたち」の授業でした。学校中を回ってプールの水や用水路の水を集めるところから始めました。微生物を顕微鏡下で見つける体験は根気のいることです。微生物を見つけた感動が大きかったのは驚きでした。あちらこちらで、「いた。いた。」という大きな声が響きました。子どもたちのよさ「興味のあることはやめない」長所と、グループ同士見つけたものを見せ合うことがあいまって、興味の連鎖が広がったのです。ミカヅキモ、ジュズモ、アオミドロ、クンショウモ、ミジンコ、ゾウリムシと、次々に見つけ出して嬉しそうな表情を見せるのです。ボルボックスを見つけたグループは、得意満面でした。こんなことをきっかけに、私と子どもたちは、少しずつ心が通い合うようになったのです。

今でも、当時の子どもたちは、折々に成長した姿を見せてくれ、回顧話をすることがあります。当時、彼らはやんちゃだったけれど、興味と好奇心の塊であったこと、それを全身で表現していたことがしみじみと伝わってきます。

授業「ヴェロニカ」を通して

平成十八年四月、八年振りに中学校に戻ることになった。あのジオラन्दルに再会するのだと真っ先に思った。私たちを結ぶ目に見えない力を感じた。

校長も教頭も全職員が公開研究授業をする私たちの校内授業研究会で、私は十一月の自分の授業に向けて、何を教材とするか悩み続けていた。幾つもの詩や小説と向き合いながら、生徒たちに自分はどう生きるべきかを深く問わせることができるかどうかを考えていた。思案の末に選んだ教材は、遠藤周作の「ヴェロニカ」だった。担任をしていた頃、年度末の教室で読むだけで終わりにしながら（その頃の私には、この作品を授業として組立てる力がなかった）、いつかきつちりとした授業として行ってみたいと思っていた作品である。この作品を通して、自らの心情に従って生きることの気高さを感じとらせたいと思った。この作品を、中学三年生になったジオラन्दルと共に読みたいと思った。

ジオラन्दルが、先に日本に来て働いていた父から呼び寄せられ、母と姉弟と一緒にフィリピンからやってきたのは、彼が小学一年生の冬だった。日本語は全く分からず、「おはよう、こんにちは、ありがとう」だけを言うことができた。

それからの一年三カ月、彼と姉のアンジェリーヌに、毎日国語の授業になると図書室に来てもらって、日本語を教えた。私は、吾が子が言葉を覚え、言葉を口にするようになったあの懐かしい時代を思い起こしながら、言葉を発する根底にある深い信頼と愛情に満ちた世界を、図書室に作りたいと願った。揺りかごの中の赤子をあやす母のように二人と遊びながら、少しずつ言葉を増やしていく二人と共に過ごした。トランプ、カルタ、すごろく、しりとり、

懐かしい遊びの道具が、日本語の言葉と文字と数の教材として役立った。特に、幼いジオラन्दルは、持ち前の好奇心と茶目っ気から誤りをものともせずしゃべりまくったので、二年生が終わるころには、クラスの子と派手に渡り合えるまでの日本語力を身に付けていった。そして今、彼は日本人以上に日本語でものを考え、日本語で自分を表現し、国語のテストで最高点を取るまでになった。しかし、その代償として失ったものはあまりにも切ない。彼は母国語を忘れ、両親特に母親と自由に会話することができない。日常語はともかく、自分の進路や生き方について親と話し合いたい年頃になっているのに、それができない辛さを彼は生きている。

私は、そのジオラन्दルと共に、人はどう生きるべきかを考えたかった。この日本社会の中で、フィリピン人として生きていく強さを身に付けてほしいと願った。どんな逆境にあっても、自らを肯定し、人を信じて生きていく力を身に付けさせたかった。「ヴェロニカ」の授業の最後に、私は、戦いのさなか敵兵を匿った内儀さんを私刑してしまった同胞が、戦後、内儀さんの銅像を建て、「あなたは我々より本当のフランス人だった。人間だった。」と言葉を刻んだ意味を問うた。二人の生徒が「反省」と答えた。次がジオラन्दルだった。彼は「尊敬」と答えた。授業が一気に収束に向かうのを感じた。授業後の感想を彼はこう書いている。「人は素晴らしい、人は美しい、と僕は思います。しかし、戦争という厳しい状況の中で、人は自分を忘れ非人道的なことをしてしまう。人が人を殺す、傷つける場面を僕は想像できません。僕は、どんな時も、いつまでも、人として優しく温かく生きていきたい。」

教師は授業を通してこそ、真に子どもとかかわれる。授業は正に生命（いのち）である。

見えない力

昭和四十年代は、塾などへ通う子が少しずつ増えてくる時代であった。期末テスト等の問題づくりでは近隣のどの塾の予想問題にもないものを出題しようと青くさいエネルギーを使いながら、私は学校と学校以外の教育機関の違いはどこにあるのだろうとぼんやり考えるようになった。

三十七年の教職生活をふり返ると、一見むだと思えるようなことからかけがえないものを感じた。学ぶことや教えることに抱くイメージは人によって大きな隔たりがある。同じことをしているようであっても、なぜこれほど違うのか。校内研究会の準備からストーブを囲んでのお茶飲み話まで、子どもの指導にまつわる多くの方との会話は私にとっての財産となっている。

自分とは相容れないという思いを抱いたり苦しさを感ずるときもあった。が、当たって砕けるというように思いで接するうちに初めに感じていたものとは全く異なるものに変わっていくことがあった。学ぶことのおおもととは自ら求める心だという考えは年々強くなっている。子どもや同僚、先輩教師や上司、考え方が似ていたり自分に都合がよかったりする場合だけでなく、異なるタイプや反発を感じるような人との話から、新しいエネルギーを引き出されるときがある。しかし、今そのときがいつなのか自らもわからない。そのような人と出会えるかどうか、これは大きな分かれ道であると思う。苦しい気持ちになっているとき、それは自分が脱皮しようとしているときであるかもしれない。

もう一つは、どれくらい子どもを信じ、その力を待んで授業を進めたかということである。

目標を高くもつこと、力のある子が満足する授業を仕組むことは学級経営にも大きく響く。その過程で子どもも相互に影響しあうところから生まれるものを侮ってはならない。どれほど力量のある教師であっても、一教師と子どもの関係のみで考えていては壁に突き当たると私は思う。総合的な学習の時間が設けられる前から、一人一人の子どもの力を引き出し、相互の響きあいをバネにして教科を発展的に学ばせていた授業があったと私は記憶している。教科書に載っている題材は同じであっても、その学習のプロセスと結果は大きく異なる。あれこそまさしく総合的な学習の目指そうとしたことではなかったか。授業は予測不可能なものを孕む生きもののようなもの、どうなるかわからないという部分を残して計画するだけの度量が要ると私は思う。それがないと、ほとんどの授業は確認にとどまり、子どもと教師で新たな発見をするという段階に進むことはないだろう。

学校の学校たる所以は、子どもが互いの力やよさを感じあうことにあり、結果的に学級や学年や学校がより高いものになること、言い換えるとその場にいる子どもと教師がより充実した時間を共有できるところにあるのではないだろうか。たとえてみれば、歌を歌うにも、一人で歌うよりはクラス全体で歌うほうが楽しく、クラスで歌うよりは学年全体のほうがずっと気分よく歌え、学年で歌うよりは学校全体で歌うほうがはるかに美しさを感じとれるようになるというようなものである。

これらのことは、なかなか見えにくい学校のよさであり力であると私は考えている。そして、普段は隠されているこの力が、これからも学校の中で温め続けられることを念じていたい。